

韓国全羅道・済州島の占い師たち

稲福みき子

1 はじめに

韓国の民間宗教では儒教原理と巫俗原理が重要な柱を成すと指摘されている。祭祀儀礼を表す用語をとってみても、〈チェーサ〉と〈クッ〉という二つの言葉がある。〈チェーサ〉には祭祀という漢字が当てられ、儒教の影響を受けた祭祀儀礼をさし、他方、〈クッ〉は韓国固有の言語であり、巫俗的な祭祀儀礼をいう。巫俗は、儒教が導入される李氏朝鮮時代、さらには仏教が国教的位置にあった高麗時代以前に遡ってみられ、民間宗教の基層を流れてきたといわれている¹⁾。

巫俗に関する研究は、これまで主にクッと呼ばれる祭祀儀礼の司祭巫、いわゆるムーダンと総称される呪術宗教的な職能者に焦点をあてて進められてきたように思われる。しかし、その態様は一様ではなく、地域的にかなりのヴァリエーションがあると指摘されている。それらは、京畿道、忠清道、江原道など中・北部地域ではムーダンないしはマンシン、パクスと呼ばれる降神によって職能を得た降神巫、全羅道や慶尚道ではタンゴルと呼ばれる世襲により職能を得た世襲巫、済州島ではシンバンと呼ばれる世襲巫と大別しうる²⁾。

ところで一方、こうした司祭巫と関連して、占いを主職能とするチョムジェンイないしはポーサル（菩薩）、経文をあげて占いや儀礼を行うポプサ（法師）などの呪術宗教的職能者の存在も知られている。彼らはいずれも降神によって職能を得た降神巫であり、全国的に存在する。近年、その数は増加し、クッを司祭するなど職能領域を拡大しつつある³⁾。とりわけ南部地域においては、世襲の司祭巫であるタンゴルが激減し、かわってチョムジェンイやポーサルなどの降神巫が巫俗の主な担い手となりつつあるといわれる⁴⁾。しかし、そのように指摘はされるものの、チョムジェンイやポーサル等に関する調査研究はきわめて手薄のように思われる。

今回、調査対象としたのは、韓半島南部の全羅道と済州島である。全羅道地域は、先に述べたように、世襲巫であるタンゴルによって巫儀が司祭され、降神巫であるチョムジェンイは占いをするといわれるように、職能が分化して併存した地域である。しかし、先に述べたように、現在では、世襲巫が消えつつあり、その一方で、チョムジェンイの司祭への職能拡大が目立っている⁵⁾。また、済州島では、シンバンとよばれる世襲巫が巫儀の司祭をし、チョムジェンイは占い

と、職能が分化併存している⁹⁾。

本報告は、その両地域におけるチョムジェンイの聞き取り調査の結果である。全羅道地域の3事例と済州島地域の3事例、あわせて6つの事例を扱った。そのうち5つの事例は、私自身のシンス（身数、運勢）を見てもらった後に聞き取りをし、他の1事例はクツ堂を見学した際に聞き取りの機会を得たものである。聞き取りは成巫過程を中心に行った。

2 全羅道のチョムジェンイ

事例1 柳 明礼さん

柳さんは女性で55才。全羅南道全州市に住む。占いを主職能とするが、クツも行ふ。

柳さんは忠清南道の公州市の出身である。子供の頃から体が弱く、春と秋には特に体が痛み出した。ただ、記憶力はよく、ものを覚えるのは好きだった。隣に、タンゴルのおばあさんが住んでいた。ある時、そのタンゴルが神クツをしているのを見てみると、その内容が自然に頭の中に入ってきた。そのタンゴルはあとで母に、娘をチョムジェンイ（占い師）にしたくないなら尼僧にするように、お寺に連れていくように言った。14才の頃である。寺に預けられることになった。そこでは昼間は芝を刈ったり、夜は勉強をして過ごした。母が1週間後に迎えに来た。母は自分を見て、＜大きな口になった＞といった。シンキ（神気）が入ったということだった。自分はどういうことかわからないので、お寺の人に聞くと、鬼神が付いているとのことだった。

母親はシンキがあったようだが、それを受け取らず、キリスト教の教会へ通っていた。一番上の姉もシンキがあった。彼女は17才で結婚したが、29才に癌で亡くなった。他の姉たちも神夢をみて、手術を受けたりしているが、誰も神を受け取ってはいない。兄は7才の時に、雷にあたって亡くなっている。父にもシンキがあった。父方の祖父母はなかなか子供に恵まれず、精気があるという鶏龍山へ何度も行って祈祷をしたという。それでも子はできずに、祖父は2番目の妻との間によりやく息子3人と娘2人をもうけた。

自分にシンキが来たのは17才からである。何度も死線をくぐり抜けたし、何度もあの世とこの世を行ったり来たりした。結婚をすると状態が悪くなると思っていたので、結婚はしなかった。しかし、周囲に勧められ、お見合いをし、26才に結婚をした。息子2人と娘1人を産んだ。2番目の息子がお腹の中にいるとき、7つの星が顔にでている夢を見た。占いに行くと血が流れることがあると言われた。その子は7才の時に麻疹にかかった。その頃はそれにかかるのだめだと言われていたが、なんとか直った。その子は7才の時からシンキがある。

32才の時、雨が降り雷が鳴っている日だったが、昼間、部屋を掃除をしていると突然に精神が出て行ってしまった。当時は夫の兄家族と一緒に住んでいて、自分が大きな声を出したので兄

嫁が来たらしいが、そのこともわからなかった。おじいさんが部屋の中に上から降りてきて、おまえがやりたいのなら筆で字を書くようにと言った。指を噛んで血を出し、その血で床に字を書いた。雷が鳴り、裸足で家を飛び出したところを弟が止めたという。気が触れたということで、群山にある精神病院に入れられた。そこに入って一週間後、夫が院長に自分を祈祷院に行かせるかと相談しているのを聞き、身一つで逃げ出した。

その後は、お手伝いさんをしたり、店で働いたりして一人暮らしをしていた。いつも具合が悪く、薬を飲んで寝ていることが多かった。夫は別の女性と一緒にになったが、うまくいかず、おまえのせいで女性と生活できない、離婚をするようにと、刀を持って迫った。42才の時に離婚した。神を受けたのは45才の時である。神クッをし、チョサン（祖上、祖先）を祀った。それ以降、自分の具合も良くなり、夫はお金持ちの女性と再婚し、子供もうまくいっている。

神を受け取ったときは一週間の間、夢に神が現れた。22人のチョサンが来た。それが誰だかはわからなかった。チョサンは服で身を覆い、遊んでいた。自分にいろいろ教えてくれるのは、そのうちの何名かだった。チョサンが揺鈴を鳴らしてくれと言ったので、法師をよび、神クッをしてもらうことにした。チョサンから習って理屈は知っていたが、儀式は知らなかったのも、全州の法師に頼んだ。夢の中で父がチリ山で勉強したということを見せてくれたので、その山でクッをした。その法師とは4～5年は行き来していたが、その後は行き来していない。

クッをして後、法堂を作り、チョサンを祀って、本格的に占いをするようになった。実家のチョサンだけでなく、夫の家のチョサンも祀っている。夫のチョサンは自分を助けてくれることはないが、子供たちのために祀っている。自分に口を降ろしてくれるチョサンは実家のチョサンで、亡くなった祖父、2人の祖母、姉とサンシントンジャである7才で亡くなった兄である。

占いやクッをするときに直接話すのは兄で、兄を通してチョサンたちの言ったことが伝えられる。兄が来るときは自分の体がブルブルッと震えるので、降神したとを感じる。占いを頼む人の四柱を言うと、兄がその人のチョサンと自分のチョサンの言うことを照らし合わせて、それらを自分に降ろす。＜口門を開ける＞、すなわち、神がかりの口火を切るのは兄である。

事例2 金 練順さん

金さんは女性で61才。光州市内のサンムデに住む。主職能は占いだ、クッも行。住まいとは別に市内の西区ヤン洞に神壇をもち、そこで占いをしている。そこを法堂ともいう。毎日、午前9時ころに来、夕方帰る。法堂の入り口にはサンムンデアジェンマ（サンムンデの小母さん）の表札がかかる。自らはポーサルと称している。ミョンドが子供なので、エギドンサ（子供道師）とも呼ばれる。客は一日平均で5～6人、多いときは20人以上ある。神は、午前・午後と時間帯には関係なく降りてくるといふ。

金さんは 20 才で結婚、4 人の息子を産み、そのあと娘ができた。その娘は体が弱く、3 才の頃からよく瀉血などをする人のところへ通っていた。いつも治療を受ける人がたくさん来ていた。ある日、娘を連れてそこへ行くと、やはり、たくさんの人が治療を待っていた。その時に突然、体が震え始め、亡くなった実家の父が来た。父は手をパチンと叩いて、お前を 10 年前から弟子にしようとしたが結婚してしまったのでしょうがない、子孫ができるまで待っていた、と言った。天地神明も降神した。その時、周りにいた人に、そんなに苦しいのかと言いながら手を当てると、その人は驚くほど具合が良くなっていた。

帰宅し、部屋にはいると、また、父が降神し、水を持ってくるように言ったので、水を持って来てお辞儀をした。それから息子にたばこを買って来るように言いつけた。一日に 40 本のたばこを吸うという状態が 5 日間続いた。父がそうさせていた。その後父は禁煙させようといい、それからは吸わなくなった。ある時は 15 才で亡くなった兄が来て、息子たちにコマを持って来るように言い、一緒に遊んだりした。金さんが 31 才の時である。

夫は自分が神がかりになると怒り、殴ったり、部屋に閉じこめたりした。夫が仕事で出かけると降神するようになった。夫や夫方の叔父、その 2 人の息子たちは、家族から占い師がでるのをとても嫌がり、やめさせようと殴った。7 カ月間、夫やその兄弟の家族から責められる日が続いた。当時大学生だった甥に割れた瓶を投げつけられたこともある。自分は息子を抱いていて、手でそれを振り払ったが、大量の血が腕から流れた。その時、亡くなった夫方の伯母が降神した。流れる血を甥に投げ、その伯母の声で 4 年後にお前を連れていくと言った。その子は 4 年後に遊技場で襲われ、亡くなった。それ以来、夫の兄弟やその家族からは口をきいてもらえず、行き来はない。

夫は自分に占いをやめさせようといろいろやった。自分も死のうと思ったこともある。米軍から手に入れた睡眠薬 15 個と毒薬 10 個を飲んだこともある。それを飲むと普通は 30 分くらいで死ぬと言われているが、自分の場合はそれを吐き、薬はそのままの形ででてきた。神が死なせてくれなかった。法律はお金で動かせるが、お金で神を動かすことはできないし、誰も神に勝つことはできない。自分と子供たち全員が食事も喉を通らない、起きあがれない日が一週間続いたこともある。すると、夫はまた自分を殴った。神は夫の留守中に来るので、神が来ていると、自分から客を呼んで占いをする、夫は怒るという毎日だった。父のシンジャン（神将、神の名）が怒って夫をくびにしようと言ったので、そんなことをしてはいけないと自分は言った。しかし、その 2 カ月後に夫が突然辞表を出して帰ってきた。夫の仕事がなくなったので、それ以降は自分の占いで収入を得るようになった。

自分は神クッはしていない。31 才に、自然に神が降りて来、神を受け取った。実家の兄嫁は 67 才で、シンキ（神気）があるとのことでこれまでに 7 回も神クッをしているが、まだ神を受け取っていない。神はその人のところへは行かずに、自分のところへ来た。自分に神が来るまで、自

分にシンキがあると思ったことはない。子供の遊びで、春光遊びという神を呼ぶ遊びがあり、子供の頃、自分もやったことがある。友達には神が降りてきたが、自分に降りてきたことは一度もなかった。

家で占いを始めていたわけだが、そのうちに父が降神して、ここを出ていくように言った。子供たちの靴が全部なくなった。父が降神し、それでもお前は出て行かないのかと言った。息子が恋人のことで夫に怒られ、自殺するということが起こってしまった。それで、自分は占いをやめた。しかし、父は降神してき、引っ越して占いをするように、そうしないと良くないことが起こると言った。娘が家のことは自分がするのでお母さんは占いをするよう言ってくれたので、ここに移ってきた。息子が死んで、9ヵ月間は占いをしなかった。ここに移って、占いを再開した。神壇は13年前に作った。

自分のモンジュ（身主）神としては、実家の父、実家の祖父、夫方の伯母というチョサンを祀っている。父は天地神明神で、すべてを教えてくれる。祖父はクムンドサ（経文道師）といい、文字を示して教えてくれる。伯母は子供の頃に亡くなっており、アギトンサ（子供道師）といって、これがミョウンド（明斗）である。ミョンドは小使いのようなもので、私の体に入り、チョサンのいうことを話す。占いをしているときの自分の声はそのミョンドの声であり、それで自分はアギトンサとも呼ばれる。神壇には仏画や神像画は祀らない。供えるものが違うのでチョサンたちが祀らせてくれない。占いは小卓に米を置き、玉水を置いて、サンドンと呼ばれる錢を投げで行う。米粒や錢の数の組み合わせで占う。小卓はサンドンを投げるためにすり減っているが、ミョンドが変えることを嫌がるので、新しいものにすることはできないという。

事例3 ユウ インソンさん

ユウさんは45才の男性。忠清南道の公州市の出身で現在は光州市内に住む。占いをし、また同時にクツも司祭する。降神クツ、ポジョンクツ、シッキムクツ、財数クツなどの依頼が多い。ユウさんによれば、降神をして、家で占いを主にする人はポーサル（菩薩）、外でクツを司祭する人はシンバンだという。ユウさん自身は自らをシンバン、ポプサと称している。

ユウさんは15才で神を受けた。母方の祖父は道師であった。武術をしたり、道術で、距離のあるところを一足飛びに移動することもできたという。ユウさんの兄弟は9人、母親もシンキのある人だった。体が弱く、何度も死に、また、生き帰っていた。百日くらいご飯を食べることができず、そのあと突然にマッコリ酒を一やかん分飲んだことがあった。また、昼寝をしていてそのまま亡くなり、沐浴をしている時に生き返って、よく寝たといったこともある。降神すると、子供がたくさんいるので許して下さいといい、よく祈祷院にも行って祈っていた。神を受け取りたくないために、マンサンという薬を飲んだこともある。それは体が硬直して死ぬというような

薬で、母はそれを飲んで死んだが、また、沐浴の時に生き返った。母の話によると、亡くなった父親が現れ、薬の瓶に水を入れて自分に飲ませたら生きがえったのだという。

ユウさんが神がかかるようになったのは小学校の頃からだという。度々体が痛くなった。中学に入ると、ますます体がおかしくなった。下半身が動かなくなった。クツをして殴って貰うと治った。それは、クツをすべきだというしるしであった。15才に、再び足が動かなくなった。母が祈祷院に連れていった。そこで、神が降りてきたが、自分は子供心に神に帰って下さいと頼んだ。神は一旦帰りかけたが、また戻ってきた。すると、自分の足が動くようになっていた。家に戻ると、正気の状態、父に向かって、私はあなたの姉だと言った。父の姉は19才で結婚し、その年に亡くなっていた。一週間の神クツをすることになり、その後で、神壇をたてた。

モンジュ神として母方祖父、母、父、父の姉、ミヨンドとして姉の亡くなった娘を祀っている。クツをするときは女性神が降神する。男性神はあまり助けてくれない。クツは日を選んで行い、そのほかの日は占いをする。一日に50～60人をみる。朝の7時から10時半ころまでに客が詰めかけ、その人たちを夕方までかかって見終える。神クツをした15才から現在まで30年間、そうしたことをやってきた。自分は上層階層から下層の人まで、階層に区別なく相手にしている。自分のところに来る人々は、自分より劣っているから来るのではなく、また自分を見に来るのではなく、自分のミヨンドのために来ている。

3 済州島のチョムジェンイ

事例4 アンさん

アンさんは56才の女性。済州市内に住む。京畿道アニヤンの生まれで、39才に済州島へ来た。自らをポーサル（菩薩）と呼んでいる。占いを主職能とし、クツの司祭もする。依頼されるクツは財数クツ、患者クツが多い。

アンさんは裕福な家に生まれた。ヤンバン（両班）の階層で、祖母は一人娘で沢山の土地を所有していた。何不自由のない生活だったが、16才の時に、父の弟が大学を卒業して牧師になり、家中が大騒ぎになった。その時、三匹の大蛇が出てくるのを見た。その蛇は、牧師になった叔父さんを殺す気配で、また、そばにあった竿もポキポキと音をたてて折れた。蛇は他の人には見えず、自分だけ見ることができた。そのうちに、祖父が倒れて亡くなり、父は離婚、再婚を繰り返して次々に財産を手放すようになっていった。父の最初の妻がアンさんの母親である。

16才で蛇を見た時には、それが何のことだかわからなかったし、自分たちが没落するとは夢にも思っていなかった。蛇は、家の業報を顕わすもので、十字架を信じた家の業報を自分が受けたのだと思う。初めてシンキ（神気）を受けたのは16才のその時である。

19才で結婚し、その後は苦労の連続であった。まもなく急に太りだし、体がおかしくなった。体が痛くてたまらずに病院に行ったが、その原因はわからなかった。夫は浮気するようになり、仕事もうまいかず、財産を失ってしまった。息子を8人産んだが、4人を幼いうちに失った。夫との争いも絶えず、仕事はなにをやってもうまいかず、とうとう37才の時に、気が触れてしまった。精神病院に入れられたこともある。食べる米に困っているのに、餅をこしらえ、蠟燭を灯して山を走りまわっていた。僧侶が、狂った女でかわいそうだ、といって助けてくれた。寺に連れていってもらい、そこで6カ月過ぎすうちに直ったので、山を下り、商売をするようになった。

39才の時に済州島に来た。来た当初は商売もうまいってが、長続きはしなかった。43才に再び気が触れた。下血したり、子供を殴ったりしていた。当時8才だった末息子が神懸かりし、父親を殴りつけた後で交通事故にあい、大けがを負った。4日間祈祷をしながら、この子を助けて下さい、自分が神を受け取り、その道を行きますからとお願いした。以前、世話になった僧は、あなたはパルチャー（八字、運命のこと）をだめにする、すなわち神を受け取らなければならぬ運命だと言った。その僧の話通りになっていると思った。

45才の時に神を受け取るシンクッをした。夫の故郷の山で行った。しかし、その時はイルヲル（日月、守護神のこと）を受け取ることができず、二日目にクッを取りやめた。それから一人で、いろいろな山で祈祷してまわった。47才の正月の一日から3日間、毎日サンバン山に行き、一晩中祈祷をした。それを終えて帰宅し、食器を洗おうとしたが眠くてたまらない、その時、虹の橋が天上から降りてきて、そこから三人の仙女が降り、扇子を持って立っているのが見えた。亡くなった母が、門を開けて仙女を通したので、お辞儀をした。夢なのか、現実なのかわからなかった。気がつくと、布巾を持ったまま座っていた。このことを神クッをしてくれた神母に話すと、占いで生きることができた、天神仏事が入った、といわれた。神クッでは神を受け取ることができなかったが、その2年後に、このような形で神を受け取った。

それ以降、客が来るとよく当たるようになった。守護神としては地理道師として四代祖父、仏道師として三代祖母と夫の母、ヨンゲンチャンガンとして海で亡くなった叔父、チョンシトンジャとして4才で亡くなった兄、ミョンドトンジャとして4才でなくなった義理の娘（夫と他の女性との間にできた子）を祀っている。地理道師が自分に占いをさせてくれ、祖母たちはそれを手伝い、ミョンドトンジャがそれらをいろいろ教えてくれる。亡くなった母は、今年、守護神として祀ることになると思う。

神クッをしてもらった神母とはクッを一緒にすることはあるが、それほど行き来はない。神母は占いはほとんどしなくなっている。済州島には900～1000人くらいのポーサルがいると思う。陸地（韓半島）、とくに全羅道から来ている人が多い。祖先のことに關しては、ポーサルはシン

バンよりも上手にこなすことができる。神の道は苦難が多いので人にこの道は進めさせたくないと思う。降神クツを頼まれると、当人が可哀想で胸が痛み、お金を多くは受け取れない。

事例5 パク・カンジン氏

パクさんは47歳の女性。済州市内に住む。自らをチョンジュポーサル（菩薩）と名乗る。チョンジュは自分の四柱と名前を合わせてつけた名である。主にチョム（占い）をしているが、クツ（巫儀）も行う。財数クツ、患者クツ、サンシン（産神）祈祷、ユアン（竜王）祈祷などを行う。

パクさんの故郷は近くの秋子島である。兄弟は妹2人と弟1人。姉がいたが、生まれてまもなく亡くなったという。11才の時に父をなくし、その翌年に自分が腸チフスにかかった。高熱が出て、頭の毛が抜け落ち、死にかかった。助からないものと思われて放って置かれたらしいが、生き延びたという。13才の時に秋子島から済州島へ来た。14才の頃から生活が苦しくなった。17才の頃に、知り合いの家に来ていたポーサルに、あなたはポーサルになるパルチャ（運命）をもって生まれていると言われた。自分をそのように感じたことはなかった。19才に現在の夫と知り合い、同居するようになった。

夫と暮らし始め、子供もできたが、生活は苦しかった。夫が病気になったり、自分の体が痛み出したり、いつもどちらかは病気をしていた。パクさんの場合は、道で具合の悪い人に出会うと、その病気が自分の体に来て、自分の体が痛くなった。お寺の僧から、あなたは前世では僧のパルチャだと言われた。周囲からクツをするように勧められたが、しなかった。そのうち、子供が急にお腹が痛いと言ったと部屋を駆け回ったり、寝ている時に突然跳ね起きたりするようになった。娘を助けて下さいと、お経を読んだり、コン（劫）をしたが、娘はよくなり、逆に、自分が娘を罵ったりしていた。夫も闘鶏やお酒に走るようになった。自分が神を受け取らないために、娘にそれが懸かってきたのだと思い、神の道に入る決心をした。37才であった。

39才の時に、神クツをした。神の道に入るために7百万ウォンほど使った。その時に法堂をつくり、また、門前祭の神も作った。しかし、神クツをしてもらった神母とあわず、それから5年間は苦勞した。神母から離れ、一人でサンシン（産神）祈祷やユアン（竜王）祈祷など、いろいろな祈祷をするうちに、イルヲル（日月、守護神）がちゃんとわかるようになり、神の仕事ができるようになった。自分は2～3回結婚するパルチャをもっている。最初が夫との結婚であり、二度目が守護神であるハラボジ（祖父）との結婚である。

守護神としてハラボジ（お祖父さん）とハルモニ（お祖母さん）、トンジャ（童子）神を祀っている。ハラボジ・ハルモニ神がトンジャ神より強く、それが肩に降りて、体に入り、声が出てくる。神が体にはいる時、体がブルブルッと震える。タリョン（唱え言）は、ハラボジ・ハルモ

ニが口火を切っている。

事例6 キム ソンヨンさん

キムさんは 36 才の女性。済州島の出身で市内に住む。自らをポーサル（菩薩）と呼ぶ。夫は全羅道光州市の出身で 37 才、ポプサ（法師）である。6 年前に出会い、結婚した。二人とも再婚である。キムさんは占いをし、クッも司祭する。財数クッ、患者クッ、ネリム（降神）クッ、ソングジュ（成主）クッ、チョサン（祖先）クッ、チルソン（七星）クッ、トケビクッ、ユアンマジ、チルソンマジなどを行う。占いでは必要なときだけ米と銭を使う。法師は経文で占う。法師によればキムさんはマンシン（万神）術あるいはテーシン（代身）術で人間の代理で神と関わり、自分はヤクサ（薬師）術、すなわち人を治療するような仕事だという。

キムさんはマンシンの家系に生まれた。母方家系は朝鮮時代から代々ポーサルがでており、母の母、すなわち祖母もポーサルだったが、母はそれを嫌い、教会へ通っていたという。キムさんがそれを母親から知らされたのは、病気になってからだという。17 才の時に、原因不明の病気になった。突然大・小便ができなくなり、体中が痛くなった。病院に行っても原因がわからなかった。これが最初のシンピョン（神病）である。22 才には子宮の手術を 3 度もした。その時、夢に子供の神が現れ、一緒に遊んだり、その子を抱いたりした。しかし、当時は、自分にシンキ（神気）があるとは思ってもみなかった。

23 才の時、同じ済州島の男性と結婚したが、うまくいかず、26 才で離婚した。屋台の店をもっていたが、24 才の頃にはつぶれてしまった。店に来た客の顔を見ると、その人がどうなるのかが自然に口から出てしまい、自分にシンキがあると気付いた。時には訳の分からないことを口にし、神懸かっているといわれた。30 才に妹の紹介で現在の夫に出会った。夫はその頃、すでに離婚していて 2 人の息子がいた。24 才の時に済州島に来て商売を始めた。当初はうまくいっていたが、破産してしまい、小さな店に替わっていた。

再婚をして 3 年後、突然に夫の目が見えなくなった。周囲の人から僧になるように言われ、夫はその道を歩む決心をした。2 か月後には目がみえるようになったが、また、その一年後には見えなくなり、意識がなくなったり、物が食べられないようになり、頭部の手術を何度もした。夫が病気になると、その痛いところがキムさん自身の体にも来た。神懸かってわけのわからないようになったりした。そのような時は山に連れていってもらった。山に行くと自然に体が動いて、前へ前へと進んだ。道が明るく開けているような感じだった。夫の 5 度目の手術の時、ポーサルのところへ相談に行くと、あなたが神を受け取らないから夫がそうなったと言われた。何力所も尋ね歩いたが、どこのポーサルも同じ答えであり、キムさんは神の道に行く決心をした。

神クッをしたのは、2 年前の 34 才の時である。神母はソウルの人であった。ソウル式の十二

巨里のクツをしていた。しかし、それは自分には合わなかった。神母のもとを離れ、済州島のポーサルに頼んで、済州島のやり方で十二のシンジャン（神将）を祀った。済州島でクツをするときは、済州島の神々を呼ばなければならない。

キムさんはチョサン（祖先）神から呪力を受けているという。どのような祖先かによって、ポーサルの力が違い、よくあたるポーサルはヤンバン（両班）の家系からでる。チョンチシンミョン（天地神命）、イルヨルソンシン（日月星辰）、チルヨルソングン（星月將軍）、ソカモニ（釈迦様）、チジャンポサル（地藏菩薩）、クワンセムポサル（観世音菩薩）、サンファンテシン（山神大王）、ユアンテシン（竜王大神）など十二神将を祀っている。それらはチョサン神であり、呪力はチョサンからもらう。その中でも3～5代の祖先が力をくれ、それより上代の祖先はそれを手伝う。また、トンジャ神として5才のハルモニ（お婆さん）神を祀っている。トンジャ神は普通、手伝いをするだけだが、キムさんの場合のトンジャは占いも手伝えるという。

4 まとめと考察

以上、全羅道地域と済州島の占い師、チョムジェンイについて6つの事例を取り上げてみてきた。いずれの事例においても病気や不幸、不和などの困難な状況があり、それが神からの知らせであり、避けられないという状況で神を受け入れたという経緯がみられ、いわばいうところの降神巫であることがわかる。しかし、その降神の経緯や職能のありよう、守護神などの神観などをみると類似点と同時に異なる点のあることがわかる。きわめて僅かの事例ではあるが、地域差に配慮しながら、類似点と相違点を以下に整理し、若干の考察をくわえておきたい。

① 呼称 取り上げた6例のなかで5例は女性、1例が男性である。女性の例をみると、全羅道・済州島の地域差に関わりなく、ポーサルと呼んでいる。仏教の菩薩からきた用語である。それに対し、男性はポプサ（法師）と呼ぶ。占い師を表すチョムジェンイ（占い師）という言葉は、職能者当人に対して直接に使われることはない。社会的な身分の低さを含んだいわば蔑称だということで、職能者当人も自らをポーサルと呼び、客のほうもそうである。しかし、人々が彼らを訪れるときは、「チョムジェンイの家へ行く」というような表現をしている。過去に彼らは賤民化された経緯があり、現在でも社会的な身分は低い。事例2に見るように、家族からそのようなものがでることは不名誉だという意識は強い。自称と他称の使い分けや仏教用語の使用にはそうした背景をみることができる。

② 地域的分布 事例をみると出身地の異なりに気付く。全羅道事例では3例中2例は忠清道出身、済州島事例では京畿道と近くの秋子島出身と、他地域の出身者である。これまでムーダンと通称される司祭巫については地域的ヴァリエーションのあることが指摘されてきた。しかし、占

い師をみると、地域的な限定性はさほど強くないようである。事例4のアンさんによると、済州島には500～600人のポーサルがおり、そのうちでは全羅道地域からきている人が多いという。

ところで、一体どれくらいの占い師がいるのだろうか。『光州の巫俗』によれば、統計的な数値はないとしながら、聞き取りから光州市内に600～1000余名で、そのうち巫業で生活をたてているものは120余名だとしている⁹⁾。また、玄容駿氏は『済州島巫俗の研究』で、恵信会という団体の名簿をもとに、司祭巫であるシンバンは373人、占い師は14人との数値をあげている⁹⁾。また、男女の比率でみると、光州市の場合は女性が80%を超えたとし、他方、済州島においては、シンバンは男性であるという通念があるにも関わらず、女性が63%を占めるしている。女性と巫俗が強く結びついていることがわかる。

さらに、『光州の巫俗』によると、光州市では占い師たちは一定地域に集中する傾向があり、タクジョンモリ一帯で72ヵ所、ケムリドンオグリー一帯で34ヵ所、ダルドンネ一帯で21ヵ所と、具体的な数値をあげている。済州島では聞き取りによると、特定地域への集中はみられないが、市内居住が多いだろうとのことであった。都市に集まる傾向性については、日本あるいは沖縄の類似の職能者についても指摘されている¹⁰⁾。

③ 職能 いずれの事例でも占いだけではなく、クツの司祭も行っていることがわかる。全羅道地域は伝統的に、タンゴルと呼ばれる世襲の司祭巫が存在した地域である。タンゴルはタンゴルパンと呼ばれる一定の領域と結びついており、その領域内での共同体および個人のクツを司祭する。しかし、先にも触れたが、その数は激減しているといわれてきた。『光州の巫俗』によれば、現在、光州市内には世襲司祭巫は一人もいないと記される。つまり、光州市の巫俗の担い手は、世襲巫から降神巫へと全く様変わりしているのである。そうした変化がチョムジェンイの職能を占いだけでなく、クツの司祭へ拡大しているといえるだろう。他方、済州島では、シンバンと呼ばれる世襲の司祭巫が優位を占め、シンバンとその他の職能者の領域は分化していると指摘されているが、事例からみる限りではチョムジェギ自体が司祭巫としての職能を持っていることがわかる。全羅道、済州島の両地域ともに、降神巫である占い師の司祭領域への関与がめだつ。

④ 降神の経緯 どのようにして彼らは職能者となったのか、いわゆる成巫過程をみると降神によることがわかる。降神はシン（神）をパドッタ（受け取った）、神がネリョッタ（降りてきた）、あるいはイルヤル（日月）を受け取ったと表現される。イルヤルとは祖先神のことである。降神をし、神クツをへて、職能者となる、という形である。降神は病気や事故などの心身の異常、経済的困難などの形で来る。

降神による病はシンピョン（神の病）とよばれる。原因不明の病気、精神病のような症状をいっている。事例1・4は気が触れたとして精神病院に入れられた経緯を持つ。どの事例にも共通しているのは原因不明の病気や度重なる病気である。ただし、それは自分自身の身に降りかかるだ

けではなく、家族の身に降りかかってくることもある。事例2は娘の病気がきっかけで突然降神しており、または何度も降神をしていたが最終的に「神を受け取る」決心をしたのは事例4では息子の大けが、事例5では娘の病氣、事例6では夫の病氣である。自覚しないままの降神はシンキ（神氣）が来た、入ったと表現されることも多い。最初の降神からいわば成巫儀礼である神クッをするまで事例によってかなり異なる。事例1では28年、事例3では3～4年、事例4では31年、事例5では27年、事例6では19年である。長短はあるが、かなりの期間にわたって苦勞を重ねている。

ところで、神クッをしたとしても、守護神を受け取れない、あるいはうまくいかない例もある。済州島の3事例ともに神クッのあとの搜神行為がみられる。これは後述する神母・神娘関係が希薄なこととも関係すると思われる。さらに、事例2のように、神クッをしない例もある。そうした神クッという成巫儀礼を欠くという点は、これまでの司祭巫女の例ではあまりみえず、占い師の特質ともいえるのだろうか。沖縄の呪術・宗教的職能者であるユタもまた、占いを主職能にしているが、明確な成巫儀礼はもたない。興味のある点である。

⑤ 守護神 守護神はモンジュシン（身主神）とも表現される。いずれの事例においても守護神として共通して祀られている神は、チョサン神、すなわち祖先神であるということである。ではどのような祖先なのかとみると、父方、母方、夫方の祖先が祀られている。さらに、トンジャ（童子）神あるいはミョンド（明凶）神として、幼時に亡くなった子供が祀られている。この童子神が、職能を果たす上で、神の世界と職能者を結んでいるという。神の言葉は童子神のことで出てくると言い、実際の占いの中の職能者の言葉は子供の言葉使いである。

かれらの祀る祖先神をみると、韓国の一般的な祖先祭祀で祀られる祖先とは様相を異にする¹¹⁾。儒教原理に則って行われる祖先祭祀の「祖先」は幼児死者を祀らないし、祀られる祖先は父系の祖先である。占い師の側から見える祖先は双系的であり、また、祖先全般ではなく、特定の祖先である。事例4・5・6で強調されたのは祖先に関するクッはシンバンよりポーサルの方が上手にできるということであった。沖縄の宗教的職能者においても村落の公的司祭たるカミンチュと民間の職能者であるユタとは死者儀礼や祖先祭祀をめぐって類似の表現がみられる。死者儀礼や祖先祭祀はむしろユタの領域とみなされている。また、沖縄の祖先祭祀で祀られる「祖先」の内容は、概ね父系を辿るが、地域によっては必ずしも厳格な父系ではなく、幼児死者も祀られるという広いカテゴリーの「祖先」である。その点も興味ぶかい。

さらに、済州島事例で目立つのは神クッを終えて後に、搜神行為がなお、続くことである。事例4・5・6のいずれの事例においても神クッをしてもらった神母とは合わないの、自分で神を搜したといわれている。これまでの司祭巫の例では、神クッを司祭した人とは神母・神娘という擬制的親子関係が結ばれ、師匠と弟子関係であるといわれているが、占い師をみる限りでは、

そうした関係は希薄で、長つづきはしないようである。沖縄のユタについては「ユタワーナイ」という言葉があり、ユタ同士はお互いに嫉妬し合うので弟子・師匠関係はないといわれている。そうした沖縄の例と相通じるものがあるのではないだろうか。

5 おわりに

以上、全羅道地域のチョムジェンイ、済州島地域のチョムジェンイについて六つの事例を取り上げ、名称・分布・職能・成巫過程・守護神の五点から整理してみた。そのなかで気付いた点を要約すると、

- ① 名称や地域的分布、降神の経緯の中に社会的な地位の低さが示されているように思える。また、そうした意味での仏教との習合が示されているのではないだろうか。
- ② 占い師の実数はつかめないが、両地域とも 1000 人まで推定されている。他方、全羅道地域では世襲巫女が消えつつあり、なかでも光州地域には存在しないとされる。
- ③ 全羅道ではそうした世襲の司祭巫にかわって、占い師の職能は司祭の領域に拡大しているようである。また、世襲の司祭巫が存在する済州島においても、占い師は司祭領域へ職能を拡げている点が指摘できる。
- ④ 成巫過程をみると、心身の異常が降神とみなされる、いわば神の「召命」によって入巫し、成巫儀礼をへて職能を得ていることがわかる。しかし、成巫儀礼が行われずに職能を得ていく例もみられた。
- ⑤ 占い師の守護神では、祖先神が重視されている。その祖先の内容は、儒教に基づいた祖先祭祀で現れる父系の祖先に限定されず、双系的な祖先や幼児死者をも含む、より広いカテゴリーの祖先であった。

以上のように要約できるだろう。巫俗は儒教と並んで、韓国の民間宗教の両軸であるといわれ、歴史を通じて、民衆に密着し、その基層を流れてきたと言われている。その中に分け入ってみると、沖縄の民間信仰のありようと相通じるものも少なくないように思える。この調査結果を手がかりにして、今後の比較研究の方向を探っていきたいと考えている。

〔注〕

- (1) 秋葉隆『朝鮮巫俗の現地研究』、養徳社、1950 年ほか崔吉城『朝鮮の祭りと巫俗』、第一書房、1980 年など。
- (2) 金泰坤、池春相、玄容駿『霊を招く—韓国のシャーマン』、図書刊行会、1977 年、77 頁。
- (3) 崔吉城『韓国のシャーマニズム』、弘文堂、1984 年、100～101 頁。
- (4) 李杜鉉・張壽根・李光奎『韓国民俗学概説』、学生社、1977 年、121～141 頁。

(5)柳東植『朝鮮のシャーマニズム』、学生社、1977年、151～153頁。

(6)玄容駿『済州島巫俗の研究』、第一書房、1985年、52～53頁。

(7)韓国の巫俗と仏教の習合については柳東植前掲書等にも指摘される。沖縄においても仏教や組織宗教との習合がみられ、その点からの比較についても興味深い。

(8)光州民俗博物館『光州の巫俗』、1995年。

(9)玄容駿前掲書。

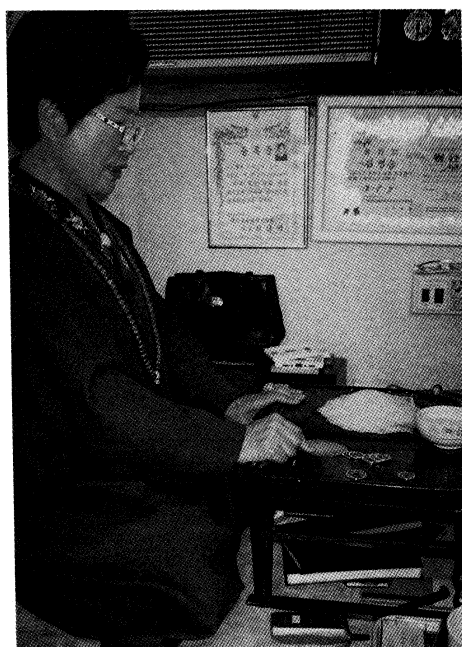
(10)W.リブラ『沖縄の宗教と社会構造』、弘文堂、1974年、109頁。

(11)R.ジャネリ・任敦姫『祖先崇拝と韓国社会』、第一書房、1993年、221～225頁。



▲光州市内のタグジョンモリー帯には
占い師の家が集中している

▶ サンド銭と米粒によって占いをしているバクさん



▲チヨム(占い)をする柳さん
サンド銭とよばれる巫具を用いる



▲チヨム(占い)をするアンさん
四柱をみながら口笛を吹く。口笛は
トンジャシンがきた合図だという



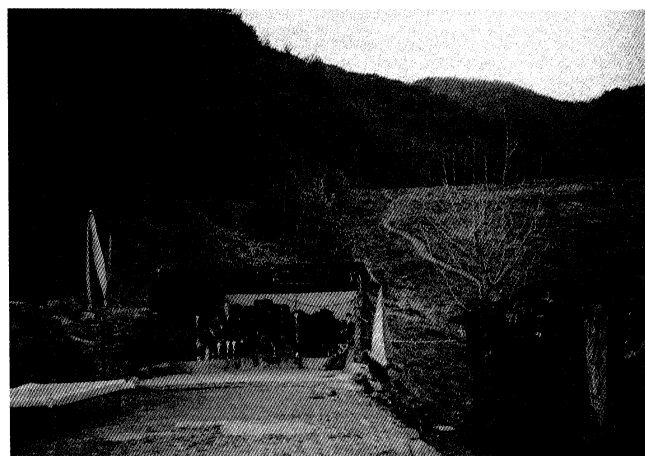
▲占い師の祭壇



▲祭壇に祀られている巫神図



▲クッ堂にクッを実修中のユウさん



▲光州市郊外にあるクッ堂の山神祭壇



◀ 済州島のパクさんが占いをしているところ



▶ 祭壇に祀られているトンジャ神

韓国全羅南道および済州島と 沖縄の文化・社会の比較研究

平成8～10年度文部省科学研究費補助金
国際学術研究(共同研究)研究成果報告書
課題番号08041082

平成11年7月

研究代表者 波平勇夫
(沖縄国際大学文学部教授)